言葉と意思と物語

流山市立おおぐろの森中学校　三年　鈴木　結

「今日、学校行きたくない。」
その一言によって全てが変わった私の人生と、今に至るまでの一年半に及ぶその物語をどうか聞いて下さい。

小学校の頃から朝がだるい、頭が痛いという理由で度々学校を休んでいた私。三ヶ月に一度は朝のだるさが原因で学校を休んでいた気がします。その言葉を母に言った令和四年六月のその朝もきっと原因はそれだったのでしょう。ただ、いつも言う「学校行きたくない」とは少しだけ事情が違いました。人生最低と言ってもいい程気持ちが沈んでいたその日は、過去に学校であった嫌な思い出や辛い感情が自分を取り囲んでいました。今の学校における環境が辛い訳では無いのに、過去に孤立していた思い出や軽いイジメにあっていたことが蘇り今の環境でそれが起こるのを恐れたあまりか、その日は学校に行く気が起きませんでした。そしてそこに追い討ちをかけるかの如く、父が
「そんなに体調が悪いなら病院に行ってきなさい。」
と言葉をかけてきました。これも私が学校を休む日の恒例と言っても過言ではなかったのですが、全てから目を背けたかった私にとって当時はその言葉がとても痛かったのを覚えています。また父の言葉から母は私に
「何がだるいの？病院にかかるならどの科？」
という質問を投げかけてきました。無視して黙り込む私を見かねて内科や耳鼻科など様々な病院の名前をあげてくれた母。そこに出てきた選択肢の内、『精神科』に頷いたことが全ての始まりだったと言えるのでしょう。

その一言、その動作から歯車が動き出してしまった私の人生ですが辛い事ばかりではないよう支えてくれた人が居ました。実は六月なんてまだまだ先の四、五月頃の事、私は当時の担任の先生に親にも言えないことを相談していました。辛い事があった時、自分を傷つけてしまう事があると。絶対に引かれる。そんな気持ちで告げた言葉に対し、先生は

「よく頑張ったね。」
とただただ優しく接してくれました。泣きじゃくる私の背中をずっとさすってくれました。その日、そして先生の優しい目は今でも忘れる事なんて出来ません。
　そして時は流れてあの日から一年が経った今。受験も控えるこの年、気合を入れて完全復帰…なんてできる訳もなく今に至るまで学校には人よりも全然行っていません。ですが今はこの環境に満足しています。理由は進路を通信制高校に決めたこと。これが挙げられます。通信制と聞いて良く思わない人、沢山いると思います。でもそんな人達にこそ聞いてほしいです。自分で見て、聞いて、感じたことで判断して欲しいと。世間に流されないで欲しいと。私も通信制高校に見学に行く前は世間のような反応でした。でも現実は違う。少なくとも私が見たその場所は天才も、秀才も集う場所でした。全日制の高校よりも進んだことをしているとすら思いました。全日制の高校だって頭がいい人も居れば、悪い人もいる。母数が大きいだけで割合はさほど変わらないのではないかと。ただ母数の大きさを考えずに頭が悪い人が行くなんて言う人はきっと中身を見ていないのではないかとそうとすら思いました。
　そしてもう一つ、私が思うことは自分の意見を少しでもいいから、しっかり前に出すということです。私は親に意見を伝えた事で今、思う存分に生活をする事が出来ていると思っています。少し怖い存在になっていた父も進路について語った際には涙を流しながら
「よく頑張ったな。」
と私が欲しかった言葉をくれました。母は私が思いを伝えた後、常日頃からずっと私を支えてくれました。そう、父も母も私と同様に、それ以上にどうあるべきかを悩んでいてくれたのだと、その時に実感しました。意見を述べたからと言って誰もがこうなるわけではありません。それでも私は意見を前に出すことが大切だと心から思っています。あの六月を後悔して、周りの目が怖くなって。けれど言葉、意思と共に前に進んだから今、私はこうして生きています。これが私の主張、そして一年半に及びこれから先も続いていく私の物語です。